

税理士の ひとりごと

No. 153

レアポケモン

税理士 齋藤明

チャッピー（チャットGPT）に聞いてみたところ、税理士の平均年齢はおおむね60歳なのだそうです、私はそのど真ん中にいます。そんな私が「そろそろ自分の引き際を考えないか」と思い立ち、徒然なるままに「会計事務所事業承継相談会」なるものに行ってきたところ、対応してくれた担当者から「『買い』のご相談ですね」と危うく他所の会計事務所の購入を勧められそうになってしまいました。

確かに税理士には定年がなく、税理士会に行くと70代・80代でもバリバリ現役の税理士がたくさんいらつしやいます。だからでしょうか、「自分の引き際を考える際の一助になればと思ってここに來たのです」と説明をしたところ、その若い担当者からは「60歳で引退の相談をされる税理士先生なんて珍しいですよ」なんて、まるで人のことをレアポケモンでも見るような目で見るとのこと。60歳になって引退を考える

なんて、サラリーマンなら当たり前のことだと思うのですが。

あるニュースによると、2025年にAIが人に代わって働くようになった結果、全米で約5万5000件もの解雇があったと伝えられています。それはどうやら、今まで働いている本人でさえ必要がないと感じていて、世の中や社会に何の貢献もしない仕事（いわゆる「ブルシット・ジョブ」）に人々が忙殺されていたところ、AIによって仕事の無駄がなくなったことに起因しているようなのです。その観点から税理士業務を俯瞰してみるとどうでしょう？ とりわけ古くからの会計事務所でも未だに行なわれているような、ノートに領収書を貼って、総勘定元帳に科目のインデックスシールを貼って、毎月雑誌しかしないような月次往査に行く、みたいな仕事はこれからドンドンなくなっていくことは間違いありません。齢（よわい）を重ねることは悲しい

何が悲しいかって？ そりゃ、今まで当たり前にできたことができなくなることでしょ。先日は、自宅の駐車場で250ccのバイクに跨りサイドスタンドを外した時にバランスを崩してバイクを倒してしまったのです。「やれやれ、やっちゃった」と渋々バイクを起こしにかかったのですが、数日前に腰を痛めていたため力が入らず、自分でバイクを起こすことができなかったのです。以前なら林道から谷に落つこちたバイクを自力で引つ張り上げて、一人で帰って来れたというのに。私はショックでただ茫然とバイクの前に立ちすくむより他ありませんでした。

その時に私はあと数年もしないうちに、同じような屈辱を、AIが進化した世界で味わうことになるであろうことを確信したのです。

良くは知りませんが、最近の若い

モンは、仕事に対する優先順位や価値観が昔とは大きく変わってきていて、
「仕事＝人生の中心」とは考えてはおらず、むしろサツサと稼いでFIRE（経済的に自立した早期リタイア）しちゃおうなんてことを考えているのではないのでしょうか？ いずれにせよ、老税理士であれば、ヤングサラリーマンであれば、仕事をするその目的は、まずは生活（お金）のためであり、あるいは社会との接点を持つことによるやり甲斐（生き甲斐）のためなのだとすると、まだ健康で体が動くうちは仕事を続けたいと思うことはある意味当然のことのように思えます。

しかし、もしも仮にある程度の資産があつて、趣味や地域のコミュニティなどで社会との接点を既持っているのだとしたら、あえて仕事を続ける必然性はないのではないだろうか？

そう考えると、自分には頑張つて70歳まで働く理由を見つけることができ



Akira Saito

昭和40年生まれ。神奈川県出身。平成15年税理士登録（東京税理士会京橋支部）。齋藤明税理士事務所所長・日本税務会計学会経営部門常任委員・医療法人研水会監事。ブログは「波乗り税理士・波に乗れるか?」http://blog.livedoor.jp/saiaki555/

【近況】豪州に留学中の長男が、今度ロサンゼルスに移住することになりました。これからは渡豪する機会がグッと減って、渡米する機会が増えるかもしれません。

ず、私の脳裏にダグラス・マッカーサー元帥の「老兵は死なず、ただ消え去るのみ」という言葉がリフレインするのです。AIが人間の仕事を奪っていく時代に、老兵は最後まで必死に適應するよう努力しつつ、自分の社会における役割や立ち位置を模索しながら、ゆつくりとフェードアウトするように。最前線から消えていくのが美しいのではないだろうか？と。うん、やつぱり自分はレアポケモン路線を目指すことにします！